智顗と吉蔵の二諦義の一断面

柏倉明裕

現存する『法華玄義』は、天台大師智顗が講説したものを弟子の灌頂が筆録し、幾度かの再治を経て、今日に伝わったものである。(1)『法華玄義』には、灌頂が整理を行った際に、吉蔵の『法華玄論』を参照にしている箇所も存在する。(2)その際に参照した吉蔵の思想が、天台教学の深奥にまで及んでいるのか、智顗の思想を論ずる場合、避けられない問題となっている。天台教学の思想内容に於ける三論教学の影響ということは、先ず両者の教学全体に於ける一つ一つの言葉の意味が如何なる思想背景によって語られているか、個々の言葉の概念の確認から始めなければならないだろう。(3)故に拙論では両者の二諦をめぐる説意を探り、両者の特徴的と思われる点を明らかにすることを目的とする。

先ず天台に於ける境の概念について、『法華玄義』の中で境、智、行の三妙は因中所乗の三軌として扱われ、「不縦不横而三而一」(大正、三三、七一四、b)という不即不離の密接な関係として表現されている。吉蔵に於ける境と智と行の関係を見ると、境は「二諦の教なるを稟け、二智を発生し、教の転ずるを境と名づく」(大正、四五、八七、c)とあるように、吉蔵は境の義について、境とは如来の教えが方便仮説であることを知り、教えに執らわれず教を転ずる無執着の境地であるとする。これは三論教学の初章の立場に立って、独自の意味に場を理解していることを表している。また吉蔵の教学で、天台教学のように境と行の関係について詳しく論じることは見られないと思われる。

また『法華玄義』は当時の二諦説を次のように見なしている。

荘厳の旻、仏果、二諦の外に出づるに拠りて、中論師の為に覈せらる。(中略)梁世の成論、世諦を執すること同じからず。(中略)陳世の中論、破立同じからず。或ひは古来の二十三家の二諦の義を明かすを破して自ら二諦の義を立つ。(中略)古今の異執各証拠を引き、自ら一文を保ちて余説を信じず。今、謂はく爾らず。(大正、三三、七〇二、b)

『法華玄義』は、このようにそれぞれが経論を証拠としてその一文に執着して是非を論じ、他人の説を顧みることがないと見なしている。このような二諦義を「今謂不爾」と斥け、さらに続けて「夫れ経論の異説は、悉く是れ如来の善権方便なり。根を知り、欲を知りて種々同じからず。」(大正、三三、七〇二、b)と、如来が善権方便として説いた説法の意を知るべきことを説く。さらに如来の意図として随情、随情智、随智の三種を挙げ、これら如来の三意を識って、偏えに一文に執着すべきでないことを勧める。特に随智ということについて、「聖人、理を悟れば但真を見るのみにあらず、亦能く俗を了す。眼の膜を除けば色を見、空を見るがごとし」(大正、三三、七〇二、b)と述べているように、ただ真を見るのみではなく能く世俗のことを照らすことを智という。この点が吉蔵との智の概念と少しく相違が見られる所である。天台教学では空に但空と不但空の二種ありとし、ただ空無執着を理解するだけでなく、智慧のある者は不空である衆生教化として の仮を識ることも空とする。このように天台に於ける空には否定的面と世俗を知り積極的に衆生教化を行う面がある。

『法華玄義』はさらに七種の二諦を明かしているが(大正、三三、七〇二、c)、七種二諦とは蔵通別円の四教と二諦の関係を機に応じて二諦について七種に分けたもので、後者の五種の二諦は、二諦を説きながらもその内容として、幻有を俗、空を真、不空を中とし、空仮中の三諦を構成要素として含んでおり、五種三諦に合することが可能となっている。

七種二諦の中でも究極に位置する円教の二諦は、真即是俗、俗即是真の不思議二諦として表現される(大正、三三、七〇三、b)。これは真俗が不二にして二、二にして不二なる一法の異名の関係にあることに拠る。吉蔵に於ては、俗諦は世俗の真理として常に真諦の所破となっており、三種二諦に於いても所破と能破は対等な不二という関係ではない。吉蔵にとって真諦と俗諦は一法の異名とはいえないのである。

また吉蔵に於て二諦と三諦について、『二諦義』巻上では、「常に二諦に依りて説法して三諦を妨げず。三諦ありと雖も常に二諦に依りて説法するに乖かず」(大正、四五、九一、b)と説き、たとえ三諦あっても二諦を出るものではないと見なしている。また中巻では二諦と三諦について、ただ衆生に随順して、あるときは二諦、あるときは三諦と説いたという立場に立っている(大正、四五、一〇一、b)。つまり吉蔵に於て四諦、二諦、三諦、一諦とは衆生のそれぞれの機に応じて説かれた深浅優劣のない関係であるといえる。またこのような立場は、「師の云はく」、(大正、四五、一〇一、c)と述べているように、法朗以来の相承なのである。また吉蔵はさらにもう一つの立場として「後の四諦、二諦、一諦は深浅大いに異なる」(大正、四五、一〇一、c)とし、四諦から二諦、一諦、

無諦へと深まって行くことを説く。つまりこれは二諦が次から次へと転じられて次第に執着が破せられ行く立場で、三重二諦に基づいている。

また智顗以前の成実師は、三仮を俗諦とし、四亡を真諦とし、現実相を因成仮、相続仮、相待仮の三仮と理解し仮有の存在にすぎないと見なしていた。天台教学に於て、現実世界はそのまま常住であり、絶待であるとする。これは世間相の一つ一つが円融三諦を内容としているからである。天台教学に於て円融三諦、一心三観は最も重要な骨格をなす教義である。天台教学で、先ず仮という概念が、智顗以前の仮の概念と異なって、菩薩の現実衆生の教化という積極的意味に定義づけられている。智顗は、智慧のあるものは但だ空を見るのみならず不空を見るとして、空に住まることとなく仮に入るべきを勧める、これが従空入仮観である。入仮とは慈悲心や本誓願によって積極的に衆生を教化し濟度し、法を説くべきことをいう。このような仮の思想の基調には慧思の仏教観の姿勢の影響があると思われる。慧思は法滅による危機意識を抱き、『法華経』を実践的関心によって尊重し、禅定を重視し、各地に於て仏法護持のために悪比丘に対して折伏を行っている。このように経典を自らの仏道実践の指針として妙法実現を目指した姿勢こそ、智顗の仮の立場の根源となっているといえる。このような利他行を勧めることは、吉蔵に全くないわけではないが、吉蔵の教学の特徴は四種釈義の内、因縁釈義や顕道釈義に見られ、「道より用を出す」とする無方釈義は簡略に述べられているに過ぎない。天台教学は、三論教学でいえば無方釈義にその思想的特色を見いだすことができるといえるのではないだろうか。

《結論》天台教学の二諦義は境妙に説かれているが、境智行の三者は、不縦不横の不可議なる関係にあり、二諦は智や行の実践論と別にあるのではなく、衆生教化の利他行と切り離して説かれるものでもない。まに境妙に説かれる二諦義は円融三諦や絶待妙の実相論をぬきにして理解されるべきものでもない。

『法華玄義』の二諦は二諦を説きながら中道の概念を用いて、内容は三諦を表している。三諦の中でも注目すべきは仮の思想で、そこには梁の二十三家や三論学派に属する人々と異なって、積極的衆生教化が説かれている。これは慧思の仏教浄化のための化他行や禅定重視の姿勢の影響を受けたものといえる。三諦説は智顗以前の二諦説や開善寺智蔵の三諦説との関係から説明することも可能であるが、さらに仮の思想は直接、慧思よりの影響を受けたものと思われ、それによって空と仮が相対することとなり、『法華経』開会の絶待妙による中という相即論理が用いられ、円融三諦として成立したと推測する。また吉蔵はあくまで三諦を用いても常に二諦に

依っており非二非不二の無執着の理を明らかにしている。

故に天台教学に於ける三諦義は吉蔵の三重二諦によって導き出されたものでもなく、三種二諦の第二重の二諦が天台教学の三諦に相似するものでもない。(4) 天台教学と三論教学は観点が全く異なっているといえる。天台教学は三諸教学でいえば無方釈義の衆生教化論や止観の実践論、『法華経』に基づく実相論に特色を見ることができる。三論教学は仏の教えの言葉に対する観念の固定化や実体的把握を排除し、教えに執われない如来の真意を求め、幾重にも執着を破し続け、無所得空を徹底化させ、仏法を深く探求することを目指しているといえる。天台教学は『法華経』によって開会された実相論の立場からあらゆる仏教教理を体系化し、構築することを目指している。

以上このようなことから、天台の二諦義に於ても三論教学の思想的影響は見られず、灌頂は吉蔵の書を参考にして『法華玄義』を修治しているところもあるが、旧説を挙げて自説との相違を明確にさせ、「今謂不爾」等として自説と分けているといえる。

1 佐藤哲英氏は『天台大師の研究』の中で、『法華玄義』は聴記本→整理本→修治本と整理修治が行われたと見なしている。

2 『天台大師の研究』三一七〜三二四頁。平井俊栄氏は『法華文句の成立に関する研究』一〇一〜一三九頁に於て、『法華玄義』巻十下の「記者私録」、巻七下「釈蓮華」、巻九下「明宗」、巻八上「正顕体」と『法華玄論』との対照を行っている。天台の教相判釈と『法華玄論』との関係については、末光愛正氏が「天台教学と三論教学」(『三論教学の研究』所収)「天台五時判と三論教学(二)」(駒沢大学仏教学部論集第二十三号)で詳しく論じている。

3 灌頂が吉蔵の文を引用した箇所について、天台三大部の中でどのような意味を持つものであるかを論じた論文として、村中祐生氏の「章安尊者と嘉祥大師(序説)」(天台学報第八号)、藤井教公氏「天台と三論の交流―灌頂の『法華玄義』修治と吉蔵『法華玄論』をめぐって」(鎌田茂雄博士還暦記念論集『中国の仏教と文化』所収)、拙稿「灌頂と吉蔵―『法華文句』にみられる吉蔵の引用文について」(印仏研四十二巻第一号)『法華玄義』に於ける天台教学と『法華玄論』―教相判釈を中心にして」(印仏研四十三第一号)がある。

4 粟谷良道氏は「天台三諦説と吉蔵二諦説」(印仏研三十一巻第一号)「天台における仮の思想」(印仏研三十二巻第二号)の中で、吉蔵の三重二諦から天台の三諦説への思想的流れを指摘している。

〈キーワード〉 智顗、吉蔵、二諦義

(大谷大学大学院修了)